

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 26 日現在

機関番号：12604
 研究種目：基盤研究(C) (一般)
 研究期間：2014～2016
 課題番号：26350709
 研究課題名(和文) 体育科授業研究組織の教員及び研究成果をつなぐネットワーク構築のための実証的研究

 研究課題名(英文) The empirical study to create a network connecting the teacher of Physical Education Lesson Study Organization and research results

 研究代表者
 鈴木 聡 (SUZUKI, Satoshi)

 東京学芸大学・教育学部・准教授

 研究者番号：70633816

 交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、体育科の授業研究に存在する一連の流れを整理してその意味を検討した。研究授業で学ぶ内容や研究協議会、実技研修の意義、外部講師の機能は、多様であると同時に職階や属性で軽重があることが明らかになった。また、研究成果や教師を架橋するシステムとして、「授業研究を研究する場」を構築し、その有効性を検討した。そこでは、教師が自身のライフヒストリーを開示し合うことで他者及び自己との対話が成立することや、自己認識を更新する場として機能することが示唆された。こうした場の提供は、研究組織を牽引するミドルリーダーの教師や、教師教育に関わるベテラン期の教師にとって価値があると思われる。

研究成果の概要(英文)：In this research, we organized the series of flows in the lesson study of Physical Education Department and examined the meaning. The contents learned in the research class, the significance of the research association, the practical training, and the function of the external lecturer were diversified, and at the same time it became clear that there is light weight in the job class and attributes. Also, as a system for cross-linking research results and teachers, we have constructed a "place to study lesson research". We also examined its effectiveness. There, it was suggested that teachers disclose their own life histories to establish dialogue with others and self and to function as a place to update self recognition. Providing such a place seems to be worthwhile for middle-leader teachers leading research organizations and veteran teachers involved in teacher education.

研究分野：体育科教育学

キーワード：体育科授業研究 教師教育 教師のネットワーク 研究協議会 授業研究における外部講師 WEBを使用した授業研究 校内研究会 ミドルリーダー

1. 研究開始当初の背景

(1) 現在、若手教員の大量採用時代を迎え、教員の実践的力量形成は急務の課題である。特に小学校現場では、勤務をしながら研修を重ねていく OJT が注目されている。そのような中、日本の教師文化の中で脈々と継承され、その成果や手法が海外にも紹介される研修制度としての「授業研究」は、教師の実践的力量形成に大いに貢献してきた。我が国では、小学校教師による授業研究は、特にその質と量の点で注目されている。教師は、学校ごとに行う「校内研究会」をはじめ、「官製の研究会」そして「民間の研究会」等に参加して実践的力量を形成している。こうした状況の中、近年の課題として研究内容の成果や運営方法が形骸化していることが指摘されている。また、採用人数が少なかったため比較的若い中堅期の教師が組織の中心となって研究を推進する立場になる現状がある。つまり、中堅期の教員の職能開発は、教員全体の資質の向上のためにも重要な課題だといえる。

(2) 通常それぞれの研究組織は単体で授業研究をしていくことが多い。組織を構成する教員どうしの連携や情報交換は行われていても、組織間の交流はほとんどなされていない現状がある。研究成果の発信に至っては、学校研究や官製研究であれば、研究発表会や年度末に作成される研究紀要という形で報告されるのみである。そもそも小学校教員による授業研究は、成果をまとめて発表する行為よりも、その過程そのものが大切な研究内容である。教材決定や解釈、単元計画や毎時間の流れを検討することが主な内容である。授業が始まったら、そこでどのようなことが学ばれ、何を修正すべきかを問い続ける必要がある。その過程でこそ、他者である教員仲間に意見やアイデアを求め、お互いに授業を検討し合う必要性や切実感が生まれるものだと言われる。そうであるなら、より多角的に意見収集をしたり情報交換をしたりできるような「研究会組織をリアルタイムでつなぐシステム」を構築し活用することは、形骸化した授業研究会を活性化させ、有用な情報や成果を教員の間で活用できることにつながると思われる。同時に、大学の研究者と学校現場の教師が連携をしていく必要性が唱えられて久しいが、このようなシステムを大学教員が作り、研究会や組織、教員の「つなぎ手」になりながら研究に参画することで、名実ともに連携研究が実現することが期待される。

2. 研究の目的

上記の課題から、以下の3点を本研究の目的とした。

(1) 体育科を研究する小学校教員の意識調査及び参与観察から、学校研究や官製研究組織

の機能構造を実証的に明らかにすること。

(2) 明らかになった「機能構造」から、大学がセンター機能を果たしながら研究組織を架橋するネットワークシステムを構築し、研究プロセスや内容の交流と連携を実施すること。

(3) その成果と課題を実証的に明らかにし、研究組織間の日常的な研究交流の方法と意義について提言すること。

3. 研究の方法

(1) 授業研究に関する先行研究、先進的研究の分析を行う。国内、海外の実態をレビューし、その現状を捉える。

(2) ヒヤリング調査及びアンケート調査を実施する。体育科を研究する教育委員会主催の研究組織（官製の教育研究会等）及び体育科を学校研究のテーマにしている学校研究組織に属する教員に対して、「授業研究の在り方」「授業研究の成果」「授業研究の課題」をどう捉えているのかについてヒヤリング調査を実施する。ヒヤリング調査で得られた内容をもとに質問紙を作成し、アンケート調査を行う。官製研究会に対してはその組織に、体育科の学校研究を行っている学校に対してはその学校にそれぞれを単位にした留め置き法によって実施する。

(3) いくつかの官製研究会、校内研究会への参与観察を実施し、そこでの「発話分析」「研究プロセスの記述」から「年間を通した連続性」の構造を捉え、理論モデルを構築する。具体的には、2つの調査と参与観察結果を集計・分析し、「授業研究」に対する教師の意識構造を理論化する。その作業を通して、教師が捉えている「成果」と「課題」を整理しながら「成功裡に終わった校内研究会のモデル」を理論化する。

(4) 生成された理論モデルを基盤に、授業研究ネットワークシステム（仮称）を構築する。具体的には、webを使った情報交換 テレビ会議システムを使った合同研究会の実施
大学研究者と研究組織の推進役の教師による拡大研究交流会の実施である。研究協力組織や校内研究会において実践的に検証する。

(5) 成果の報告については、調査の結果を中心に、学会発表、学会誌、教育啓蒙誌にて報告する。最終年度末には、研究成果と教師をつなぐ体育科授業研究ネットワークシステムをテーマとしたフォーラムを開催する。研究成果を統合し、学会等で報告するとともに、免許制度、研修制度、プログラムに関して提言を行う。

4. 研究成果

(1) 校内研究会で体育を研究する機能

本研究は、体育科を研究する小学校の校内研究会組織に注目し、教師が同僚とともに授業研究をすることの機能をどのように捉え、何をもちいて校内研究の内容だと捉えているのかについて明らかにすることを目的とした。質問紙調査の結果から、多くの教師が、「授業充実・同僚性」「授業観・児童観交流」「児童理解・事後分析」「授業方法・効率化追究」「講師による一般化」をその機能として捉えていた。課題については、「研究目的の不明確さ」「専門知識の不足」「負担・多忙感・温度差」「推進方法・環境の不備」が挙げられた。教師が捉える機能が発揮され、課題が克服されるためには、校内研究会を学校の中だけで研究をするのではなく、相互交流や情報交換が随時できるシステムの構築を求めていることが解釈された。この結果から、校内研究組織を架橋し、研究内容や成果に関する情報をリアルタイムで交換できるシステムを構築していく必要性が示唆された。なお、本成果は、学会発表に留まっており、今後論文として発表する予定である。

(2) 研究組織におけるミドルリーダーの資質

本調査では、体育科を視点とした研究組織を推進するミドルリーダーの実態について明らかにするとともに、求められる職能について考察することを目的とした。得られた結果及び考察をもとに、ミドルリーダーに求められる職能の構造化を試みた。抽出された4つの因子は、縦軸をパフォーマンス型（目標達成志向）-メンテナンスタイプ（人間関係に配慮し集団を維持する志向）、横軸をマネジメント型-プレイヤー型の2軸4象限で表した（図1）。

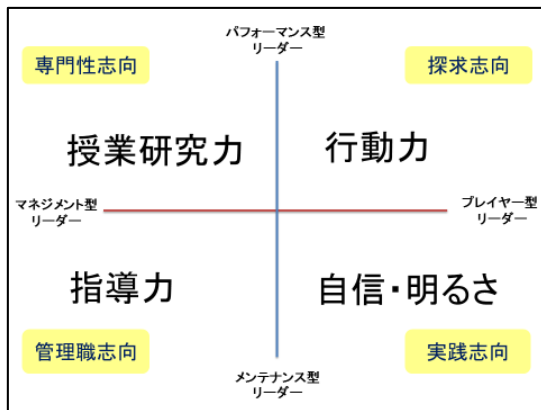


図1 ミドルリーダーに求める姿

「授業研究力」は、研究を推進していく上で理論構築や情報収集を伴う専門性の発揮が求められるため、専門性志向を表しているといえる。「指導力」は、他の教員に対する指導性の発揮や将来管理職になることを期待されている因子であることから、管理職志向と考えられる。「行動力」は、研究会に参加したり管理職の方針を実現させたりする

ような実働を生み出す力であり、探求志向といえる。「自信・明るさ」は、組織のよい雰囲気を作り出したり同僚性を構築したりすることが期待される因子であり、実践志向と捉えられる。また、職歴を横軸に、図2のように生成したミドルリーダーの型を縦軸に、ミドルリーダーに求められる職能（内容によっては資質とも言える）を構造化したところ、図2のように捉えられた。

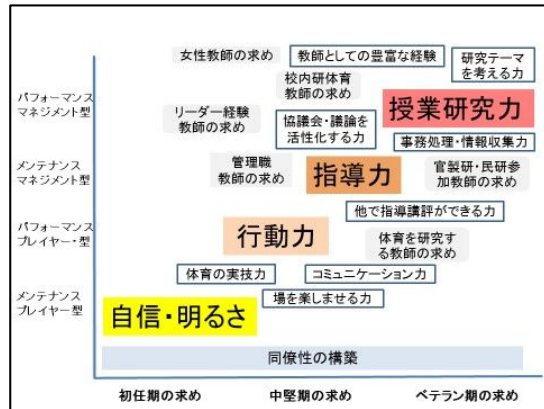


図2 ミドルリーダーの職能構造案

以上のことから、経験年数や教師内での相対的な位置づけ等によって、ミドルリーダーに求められる職能や役割が変わってくるのがわかる。ミドルリーダーになりたての頃は、同僚とのコミュニケーションや教師同士の関係調整能力が問われる。その前提には日々の献身的な働きや、人柄の良さといったことが求められる。さらに、同僚を多角的に見たり自身の実践力の維持向上も問われたりすることになる。教わるといった謙虚な態度も必要となるため、学び続ける姿が求められる。そのような体験を積むことで、他教師への指導力や授業研究力が身につくのではないかと。

生成された職能構造を概観すると、このような力がある教師は、ミドルリーダーとしての理想的な姿であるだけでなく、実践者としてのモデルとなる姿だともいえる。そう考えると、ミドルリーダーになるということは、他の教師から憧れられるような実践者になることといえるのではないだろうか。ミドルリーダーの存在が学校組織の中で必要と考えるならば、こうした視点を持ちつつ、授業研究によって実践的力量を高めていくことで実現する可能性がある。ミドルリーダー向けの研修会や情報交換会の実施、育成するための教員養成や教師教育の在り方を考えていく視点としたい。なお、本報告は、2015年に開催された日本スポーツ教育学会第35回記念国際大会にて発表した。考察をより深め、今後も検討をしていく計画である。

(3) 授業研究における外部講師の機能

本研究では、小学校体育科の校内研究会における授業研究の一連の流れの中に存在する外部講師について着目し、外部講師の存在

意義をどのように意識しているかについて、教師への意識調査を通じて、明らかにすることを目的とした。教師は、外部講師に対して「授業研究の分析・解釈」「研究内容の指導・評価」指導技術や学習指導要領の「伝達・指導・紹介」「新視点の提供」を行うことを求めている。校内研究会においては、「指導技術を伝達」することや、「外部講師や同僚と議論すること」を求めている。詳細には、「話題提供者的側面」「評価者的側面」「指導技術の伝達者的側面」「ともに議論する対象者的側面」を有しており、外部講師の存在意義は多様であった。また、性別、民間研究会への参加非参加、研究推進委員長の経験の有無、職歴といった教師の属性によって、求める内容に軽重が見られたことから、外部講師の存在意義がいくつか存在することに何かしら影響を及ぼしている可能性があることが示唆された。

外部講師は、学習指導要領や体育学習を進める上での知識や指導技術を「伝達する」だけでなく、外部講師自身のものの見方や考え方というフィルターを通して学習指導要領と実際の授業を「媒介し」、意外な視点を提示することも求められていると捉えることができる。教師は、授業研究の場で知識や指導技術を伝達されるだけでなく、多角的に授業や実践を考えていくパースペクティブ、即ち、今後の見通しや展望を与えてもらうことを外部講師に期待していると言えるのではない。教師のそのような求めに応じていく姿が、校内研究会における外部講師の存在意義だと言えるだろう。

こうした知見から以下のことが提案できる。まず、校内研究会において俯瞰的にもしくは指導的な立場に関わる「外部講師」について言えば、学習指導要領の内容を伝達したり、授業を評価したりするだけでなく、専門的な知見から「授業をこう見た」という解釈や意味づけの提示を教師は期待していることを自覚すべきであろう。例えば外部講師は、授業に対して「こうあるべき」という当為論から講評をするだけでなく、「自分はこの事実からこの事象をこう見た」という存在論からの語りを期待されていると考えられる。特に、身体活動が中心で様々な視点が存在する体育科を研究する場であるからこそ、このような役割が求められるのではない。言い換えれば、外部講師の資質として、豊かな「児童や授業を見る視点」を有していることが求められているのである。また、校内研究会を推進する立場の教師にとっては、この知見は外部講師を選ぶ際の選択基準となり得ると思われる。また、校内研究をともに行う同僚の教師には、多様な外部講師に対するニーズが存在している可能性にも気を配る必要がある。さらには、外部講師は体育・スポーツ政策の「伝達者」であるだけでなく、「媒介者」とあるという解釈を援用するのであれば、外部講師の指導講評においては、外部講師個

人のものの見方が強く反映された内容となっていることも改めて双方が自覚しておく必要がある。

また、教師は校内研究会を「講師や同僚と議論する場」として捉えていた。坂本・秋田(2008)は、研究協議会ではできるだけ参観した授業の根拠となる事実を述べるのが大事であると述べている。教師だけでなく外部講師もまた、その一員として加わることが求められることが、本研究からも言えるのではない。例えば、村川(2012)は、ワークショップ型の校内研修を推奨している。校内研究における研究協議会において、参観した授業について参加者が解釈を述べ合い、出された意見を整理し構造化する効果を提案している。また、千々布(2012)は、その意義を「幅広い参加者の発言を促す」「議論が焦点化する」「多面的な見方ができる」「集団思考により課題が明確化し、新たな解決策が発見できる」等としている。こうした取り組みは、「外部講師や同僚との議論」が実現し、外部講師の存在意義が生かされる方法論と捉えることができるだろう。

校内研究会は、学校で行われる研究であるが故に、研究内容や方法、授業分析の仕方等々の成果の広域に渡る交流が難しい。外部講師が他校の例を紹介したり、情報交換を促したりすることで校内研究会の架け橋となれば、その成果を共有していくことも可能である。その意味からも、校内研究会における外部講師は、体育・スポーツ政策の媒介者だといえる。(本項は、「体育科を研究する小学校校内研究会における外部講師の存在意義に関する研究」体育・スポーツ政策研究、25巻1号、2016、1-18より引用し、一部加筆修正して記した)

(4)TV 会議システムを利用した授業研究

本研究の中で、遠隔 TV 会議システム等の利用により、リアルタイムに学校現場と大学や他の学校をインターネット回線でつなぎ授業研究を行う試みを行った。これにより、授業研究の「現場」に行かなくてもリアルタイムで授業を参観し、研究協議会に参加することが可能となった。多忙な学校現場では、授業研究における事後の分析に時間が割けない現状もある。例えば、このシステムを使用すれば、教員養成期の学生が学校現場に向かなくとも授業観察が可能になり、分析を行うことも実現する。分析結果を学校に戻し、学校ではそれを基に解釈や考察を深めて検証しながら日々の授業に活かしていくようなサイクルができれば、双方にとって利点があると言えよう。そのような連携を進めていく上で、本システムは有効であることが示唆された。参加者の声によると、ビデオ録画による授業研究との差異性を、臨場感や「今、起きている事実」という感覚があることから、リアルな授業研究という意識で臨むことがあがった。なお、本研究においては、エィネ

ット株式会社のテレビ会議 / WEB 会議システム、「FreshVoice」を使用した。また、本システムを使用した授業研究の内容は、教育啓蒙誌（光文書院「こどもと体育」誌 Live Lessons）にて報告した。

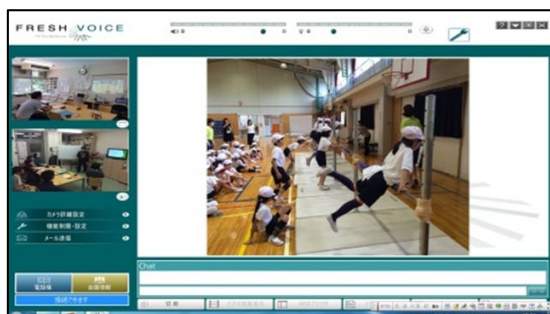


図3 TV会議システム画面

(5) 研究組織を架橋するシステム構築

本研究を推進しながら、「授業研究会を研究する研究会」の設立を目指した。2015年3月に「授業研究組織と研究成果をつなぐ体育授業 Build a Bridge 研究会」、2016年8月に東京学芸大学公開講座として「校内研究会の進め方」を開催し、中間報告を行った。また、2017年3月に本研究の報告会として、「研究報告会・シンポジウム」を開催した。参加者は校内研究会や官製研究を推進するミドルリーダーの教師が多く、研究内容の報告だけでなく、推進の仕方や研究方法の情報交換、授業研究を通じた教師の学びそのものが対称となり、ニーズがあることが示唆された。今後、継続的に研究組織を架橋するシステムとして機能させていきたい。

(6) 成果の発信

本研究の成果の発信については、以下の方法で行った。

啓蒙誌による発信

大修館書店「体育科教育」誌における連載「教師が育つ体育科授業研究」において、以下の通り研究内容と報告を掲載した。掲載した論考のタイトルは以下の通りである。

- ・ 体育科授業研究の現状と課題
- ・ 研究発表会で大切にしたいこと
- ・ 学校研究で身につけたい授業力
- ・ 研究活動を推進するミドルリーダーの存在
- ・ 校内研究会で教師はどう育つか
- ・ 開発途上国の体育開発におけるミドルリーダーの育成の現状
- ・ 教師はなぜ民間研究会に参加するのか
- ・ 授業研究会における教師の信念
- ・ 授業への思いを『語る』こと、『聴く』ことの意味
- ・ 授業研究で出会う他者からの衝撃
- ・ 授業研究で出会う他者からの衝撃
- ・ 実践報告のすすめ
- ・ 校内研究会をリードする教師の内実
- ・ 研究授業で授業者は何を学ぶのか

- ・ 授業観察の視点 - 児童の思考・判断を観る
- ・ 体育で築くナナメの関係
- ・ 研究協議会における ICT の活用

なお、連載は、最終年度終了後も継続していく。また、外部講師の機能については、論文「体育科を研究する小学校校内研究会における外部講師の存在意義に関する研究」を体育・スポーツ政策研究にて発表した。

学会発表、シンポジウム実施

本研究の成果は、日本体育学会、日本スポーツ教育学学会において発表した。また、日本体育科教育学会のラウンドテーブルにおいて情報提供を行った。また、1年次末には、研究会(2015.3)、3年次末には、シンポジウムを開催(2017.3)して研究成果を報告した。

<引用文献>

- 千々布敏哉、ワークショップ方式の意義と活性化の戦略、ワークショップ型校内研修充実化・活性化のための戦略&プラン 43、村川雅弘編、教育開発研究所、2012、20-25
- 村川雅弘、ワークショップ型校内研修の企画・実施のポイント 15、ワークショップ型校内研修充実化・活性化のための戦略&プラン 43、村川雅弘編、教育開発研究所、2012、10-19
- 坂本篤史・秋田喜代美、授業研究協議会での教師の学習、授業研究・教師の学習、明石書店、2008
- 鈴木聡、体育科を研究する小学校校内研究会における外部講師の存在意義に関する研究、体育・スポーツ政策研究、25巻1号、2016、1-18

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計22件)

- 鈴木聡、研究協議会における ICT の活用、査読無、体育科教育 65 巻 3 号、2017、70-72
- 鈴木聡、授業観察の視点 - 児童の思考・判断を観る -、査読無、体育科教育 65 巻 1 号、2017、58-60
- 鈴木聡、庄司佳世、Live Lessons 2 年生 シュートボールゲーム、査読無、こどもと体育 173 号、2017、24-25
- 鈴木聡、体育科を研究する小学校校内研究会における外部講師の存在意義に関する研究、体育・スポーツ政策研究、査読有り、25 巻 1 号、2016、1-18
- 鈴木聡、内田雄三、近藤智靖、山口拓、体育科授業研究組織の教員及び研究成果をつなぐネットワーク構築のための実習的研究、査読無、体育科教育学研究 32 巻 1 号、2016、45-45
- 鈴木聡、近藤智靖、内田雄三、体育科を研究する研究組織の現状と課題、

体育科教育学研究 31 巻 1 号、2016、82-82
鈴木聡、研究授業で「授業者」は何を学ぶのか、査読無、体育科教育 64 巻 12 号、2016、70-72

鈴木聡、校内研究会をリードする教師の内実、査読無、体育科教育 64 巻 11 号、2016、66-69

鈴木聡、実践報告のすすめ、査読無、体育科教育 64 巻 10 号、2016、58-61

鈴木聡、小学校教師が体育授業研究に求める機能 - 教職歴に伴う変容 -、査読無、体育科教育学研究 32 巻 2 号、2016、35-40

鈴木聡、「研究協議会」における教師の司会力、査読無、教育研究 71 巻 9 号、2016、18-21

内田雄三、授業への思いを「語る」こと、「聞く」ことの意味、査読無、体育科教育 64 巻 6 号、2016、66-68

鈴木聡、授業づくりにおける教師の信念、査読無、体育科教育 64 巻 5 号、2016、68-70

鈴木聡、教師はなぜ民間研究会に参加するのか、査読無、体育科教育 64 巻 4 号、2016、66-68

山口拓、鈴木聡、発展途上国の体育開発におけるミドルリーダー育成の現状、査読無、体育科教育 64 巻 3 号、2016、68-70

近藤智靖、研究活動を推進するミドルリーダーの存在、査読無、体育科教育 64 巻 1 号、2016、54-56

鈴木聡、Live Lessons 3 年とび箱運動、査読無、こどもと体育 172 号、2016、24-27

内田雄三、学校研究で身につけたい授業力、査読無、体育科教育 62 巻 12 号、2015、70-72

鈴木聡、研究発表会で大切にしたいこと、査読無、体育科教育 63 巻 12 号、2015、62-64

鈴木聡、体育科授業研究の現状と課題、査読無、体育科教育 63 巻 11 号、2015、44-46

〔学会発表〕(計 6 件)

内田雄三、体育科授業研究組織における初任期教師の意識に関する一考察 - 初任期教師が求めるミドルリーダー像に着目して -、日本体育学会第 67 回大会、2016.8.25、大阪府泉南郡熊取町、大阪体育大学

鈴木聡、体育科授業研究組織におけるミドルリーダーに関する一考察 - ミドルリーダーに求められる職能に視点を当てて -、日本スポーツ教育学会第 35 回記念国際大会、2015.9.19、東京都世田谷区、日本体育大学

鈴木聡、保健体育教師教育の課題と未来、日本体育学会第 66 回大会シンポジウム、2015.8.26、東京都世田谷区、国士舘大学

鈴木聡、内田雄三、近藤智靖、山口拓、

体育科授業研究組織の教員及び研究成果をつなぐネットワーク構築のための実証的研究、日本体育科教育学会第 20 回大会ラウンドテーブル、2015.6.21、神奈川県横浜市、横浜国立大学

鈴木聡、校内研究会で体育科を研究する機能に関する研究 - 小学校における校内研究組織に着目して -、日本体育学会第 65 回大会、2014.8.27、岩手県盛岡市、岩手大学

鈴木聡、近藤智靖、内田雄三、体育科を研究する研究組織の現状と課題、日本体育科教育学会第 19 回大会ラウンドテーブル、2014.6.22、宮城県柴田郡柴田町、仙台大学

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.u-gakugei.ac.jp/~satoshi/index.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

鈴木 聡 (SUZUKI, Satoshi)

東京学芸大学・教育学部・准教授

研究者番号：70633816

(2) 研究分担者

内田 雄三 (UCHIDA, Yuzo)

白鷗大学・教育学部・准教授

研究者番号：40615803

近藤 智靖 (KONDO, Tomoyasu)

日本体育大学・児童スポーツ教育学部・教授

研究者番号：50438735

山口 拓 (TAMAGUCHI, Taku)

筑波大学・体育系・助教

研究者番号：20643117